

## 入選

### コロナが教えてくれたこと

香川県 三木中学校

二年 高木 麻結

コロナが世界中に流行して、2年目の夏がやってきた。

私たちの生活は、来る日も来る日も「うがい」「手洗い」「消毒」「マスク」「適切な距離」だ。旅行に行くこともなくなり、学校生活の活動の場も縮小された。もし、コロナが広がっていなかったら、どんな生活になっていたか、などと思うことも多々あった。各地のお祭りも相次いで中止となり、人とのコミュニケーションが取れなくなってきたと感じていた。

ある7月の暑い日、近くのスーパーに買い物に行った母と弟と私の3人は、家に帰ってきて思いがけない場面に遭遇する。家の玄関の前で、一人の老人が腰を下ろしていたのだ。私たちはとても驚いた。

「なにか用事で来て、留守だったから待っているのかな。」

「体調が悪くてうちの玄関の前で休息しているのかな。」

とお互いに言い合った。家に着いた母は、

「どうかされましたか？」

と老人に尋ねた。すると、

「ここの道を歩いていましたら、暑うてちょっと休ませてもらとんや。」と言った。

「どうぞ、どうぞ。ゆっくりしてってくださいね。」

と母は言って、家の中に入った。入ると同時に、

「この暑さだから、おじいちゃんに、冷たい麦茶を持って行って。」

と私や弟に言い、紙コップに氷を入れ、麦茶を注ぎ始めた。

私は少し考えた。コロナ禍の中、知らない人の家の物を飲むだろうか。断られることが必須だ。そうこうやっているうちに、ドアを開けると、いつの間にかおじいさんはかなりの距離を歩いていた。いやな思いをしなければいいな、と私は思いながら、母と弟の3人でそのおじいさんのところまで、コップに入れた麦茶を持って走った。

「すみません。」

母が呼び止めると、おじいさんは振り向いて、驚いたように立ち止まった。母が、

「少しですが、暑いですからどうぞ。」

と言ってコップを差し出すと、おじいさんは、マスクをはずして嬉しそうに笑って、

「すみません。助かったよ、ありがとう。」と言って、コップの麦茶を飲み干した。夏の空は乾いていて、立っているだけでも汗が流れるほどだった。

「はあー。暑かったけん、お茶が冷とうてよかった。」

おじいさんの声を聞いて、私たちはとてもなごやかな気持ちになった。コロナ禍の中でも、なにか人の役に立つことができたような気がして嬉しかった。

親切心は押し売りではない。相手の気持ちになれば、自然と行動に移せる。コロナ対策は必要だが、人との関わりまで失ってほしくない。そうコロナが教えてくれた気がした。